

第2章 浜松市の維持及び向上すべき歴史的風致

平成 17 年(2005)の広域合併で形成された浜松市域は、大阪府や香川県、あるいは東京都(いずれも島嶼部は除く)など、小規模な都府県とほぼ同程度の面積がある。市域は前章で紹介したように 2,000 メートルを超える山地から太平洋・浜名湖まで、起伏に富んだ地形から成り立っている。明治 22 年(1889)の行政区分では周智郡から敷知郡までの 6 郡にまたがり、当時の町村の数は 59 に及ぶ。この広大な市域に存在する多様な地域の歴史文化資源について、その特徴を明確にして歴史的風致を設定する。

市域はまず、天竜川の中下流域と浜名湖を含む都田川流域に区分される。天竜川は南北に長い本市を縦貫し、二俣以北が中流域、以南が下流域となる。長野県飯田市の天竜峡付近から険しい山地を流れる天竜川は県境付近で中央構造線を越えてなお山間を蛇行しながら南流し、二俣以南で様相を一変させて扇状地また三角州を形成する。二俣は里と山間を結ぶ結節点で、古代から交通の要衝として機能してきた。中流域は中央構造線に近い市北端部で溪谷が険しいが、その南側のとくに石灰岩地帯では傾斜が緩やかとなり、支流の気田川では

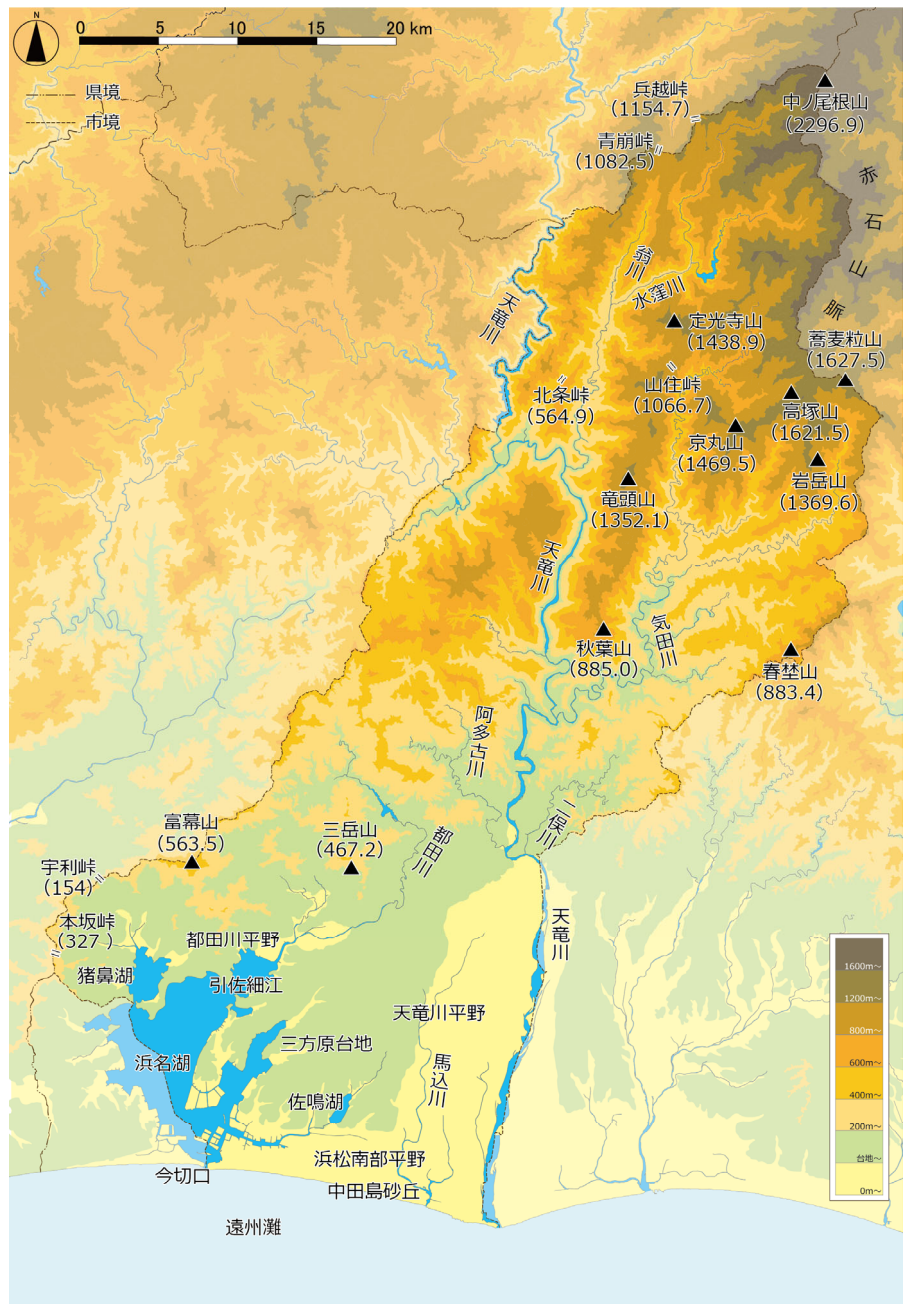


図2-0-1 浜松市の地形

幅広い中州を形成している。

下流域は古い扇状地が隆起した三方原台地と、現在の天竜川が再度台地を削った溪谷に堆積した沖積平野である。本市の三方原台地と東側の磐田市にあたる磐田原台地は、もともとひと続きの扇状地だったが、隆起とともに天竜川が深い谷を刻んで、その後の海面上昇で現在の沖積平野が堆積した。

都田川は、天竜川と比較すると小規模な河川で、中央構造線南側の外帯、とくに石灰岩地帯を流れ、比較的緩やかである。浜名湖は都田川下流の溪谷(内湾)で、東側の天竜川の堆積が早かったため、海岸の砂州が発達して湖を形成した。都田川上流部と下流部(浜名湖畔)の結節点には、気賀、三ヶ日などの水運を結ぶ複数の結節点が形成された。

こうした特長から、天竜川下流域(平野と三方原台地)の地域、浜名湖の周辺地域、天竜川中流域の山間地と、大きく3つに地域を区分することができる。いずれの地域にも複数の歴史・文化的な背景があり、これらによりそれぞれの歴史的風致を設定していく。

(1)天竜川平野と三方原台地(歴史の表舞台)

市域南部には天竜川が形成した平野と、その平野部が古い時代に隆起してできた三方原台地が広がっている。台地の縁から平野の裾にかけては原始からの人々の営みの跡が残され、原始以降からこの平野・台地部がこの地域の中心部として繁栄してきた。また、この地域からは浜松という地名の由来がわかる文字資料も発見されており、有史以来、歴史の表舞台となってきた。

①浜松城を巡る武将たちの去就

今川義元が織田信長に敗れた桶狭間の戦いから江戸幕府の政治が安定するまで、遠江の各地に勢力基盤を持つ国衆は、徳川家康や武田信玄といった地域の覇権を争う大名の攻防に翻弄された。浜松城や城下町などにはその痕跡が残されている。

②都市化の過程

現在の佐鳴湖から浜松城跡周辺にかけての地域は、原始～現代にかけて一貫してこの地域の中心地であった。また、平野・台地部では、各時代で様々な資源が集積され、現代まで続く都市の発展の過程を感じることができる。

(2)浜名湖(温暖な気候が育んだ生活文化)

浜松を含む古代の国名「遠江」は、浜名湖を中心とした風景から名付けられ、近江とよばれた琵琶湖と対比される。また、温暖な気候の浜名湖畔ではその恵みを受けた文化が生まれ、遠州灘に近い東岸の表浜名湖地域は、豊富な水産物の恩恵と東海道の影響を受けた生活文化

を今に伝えている。また、北岸の奥浜名湖地域は、^{ひめかいどう}姫街道沿いに特徴ある由緒を持つ神社や多様な宗派の寺院が立地する宗教空間が広がり、貴重な歴史文化資源が残されている。

①湖をめぐる生活文化

浜名湖の周辺には、漁労・養殖を中心とした生活文化と、東海道の宿場町の賑わいを感じられる歴史文化資源が残されている。また、積極果敢な進取の気風のもと、新たな産業や文化を取り入れることで自律的な発展を遂げてきた。

②社寺の宝庫

浜名湖の北岸、奥浜名湖と呼ばれる地域には、東海道の脇往還である^{ひめかいどう}姫街道が通り、周辺には特徴的な祭礼を伝える社寺が立地している。これらの社寺には、地域の信仰を今に伝える文化財が多く残されている。

(3)中央構造線に沿った山間地（^{おくみかわ}奥三河と^{みなみしんしゅう}南信州との繋がり）

市域北部は天竜区の二俣地域を起点に山間部が広がっている。南の平野部と北の山間部の結節点にあたる二俣地域は交通・交易の要所、山と里の文化を繋ぐゲートウェイ（結節点）として重要な地域として、様々な時代の歴史文化資源が残っている。山間部では赤石山脈へ続く山々には^{しゅげんどう}修験道・山岳信仰の聖地として今も信仰が残り、中央構造線沿いには^{おくみかわ}奥三河・^{みなみしんしゅう}南信州との繋がりを感じられる長い伝統をもつ民俗芸能や祭礼が多く伝えられている。

① ヤマとサトをつなぐゲートウェイ/戦国大名の攻防

市域北部に広がる山間部（ヤマ）の起点にあたる天竜区二俣地域は、市南部の平野部（サト・マチ）とを繋ぐゲートウェイである。古代から陸上・水上交通の中継地、交易の要所であったこの地域には、古墳・城跡をはじめとした豊富な歴史文化資源が残る。また、地域を通る^{あきは}秋葉街道は^{みなみしんしゅう}南信州・^{おくみかわ}奥三河・^{とうえん}東遠地域を結んでおり、戦略上の要所として戦国大名の攻防の舞台ともなった。

②^{しゅげんどう}修験道と山岳信仰

山間部に点在する^{あきは}秋葉山、^{はるの}春埜山、^{こうみょう}光明山、^{やまざみ}奥山、^{しゅげんどう}山住山は、^{しゅげんどう}修験道の聖地・霊山として山岳信仰の対象となってきた。これらの山へ至る道沿いには、常夜灯などの石造物をはじめ多様な歴史文化資源が残されており、地域の人々の信仰を感じることができる。特に、南北往来の道としても機能した^{あきは}秋葉街道沿いには多くの歴史文化資源が残されている。

③豊富な民俗芸能

^{あきは}秋葉街道などの信仰の道で^{おくみかわ}奥三河や^{みなみしんしゅう}南信州と繋がっていたこの地域は、隣接する地域と生活習慣などに共通性が見られるとともに多様な民俗芸能が伝えられている。著名な研究者が足を運んだこの地域は、^{おくみかわ}奥三河・^{みなみしんしゅう}南信州とともに「民俗芸能の宝庫」といわれている。

こうした状況を整理し、以下に示す12の歴史的風致を設定する。

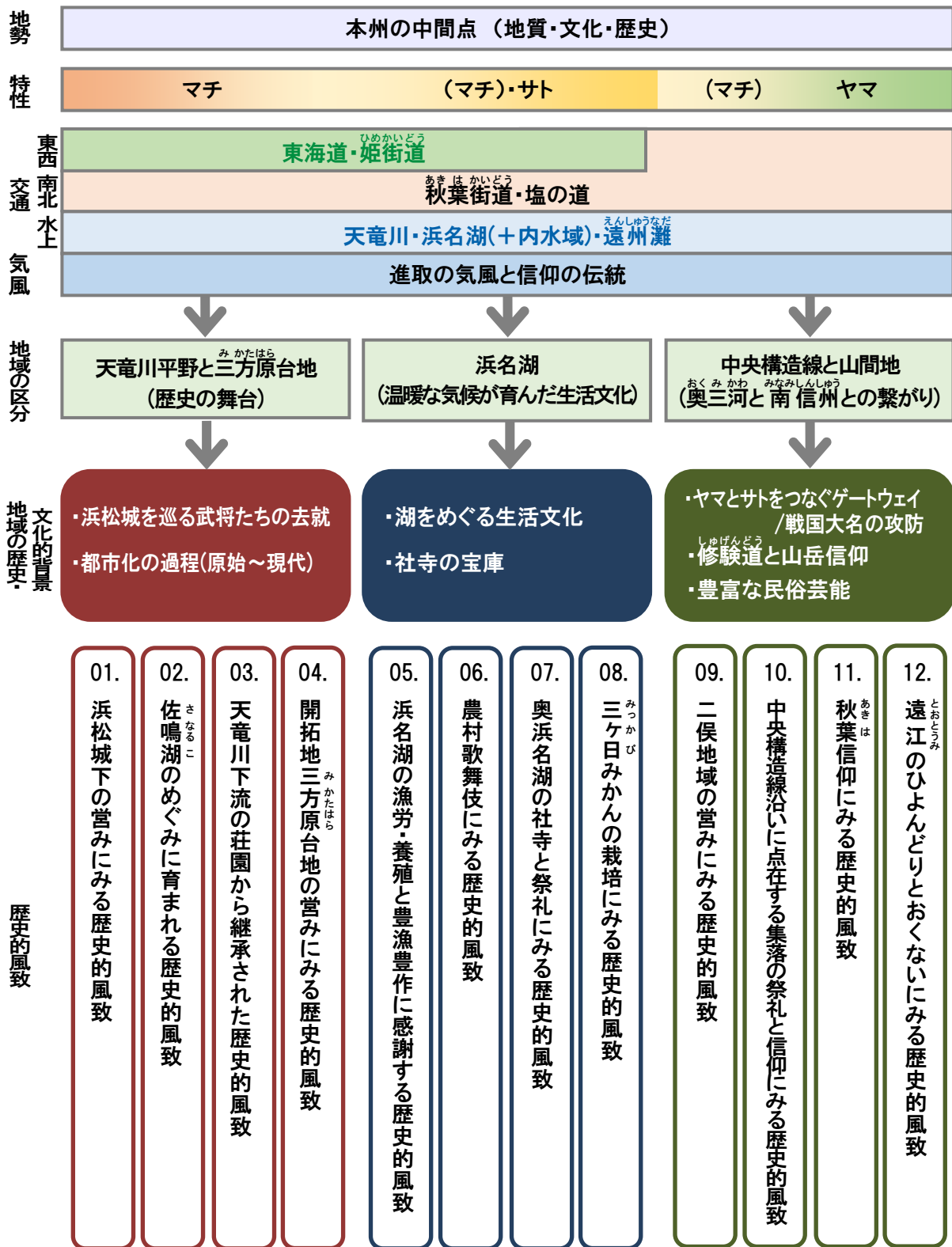


図2-0-2 浜松市の地域の区分、地域の歴史・文化的背景からみた歴史的風致の整理

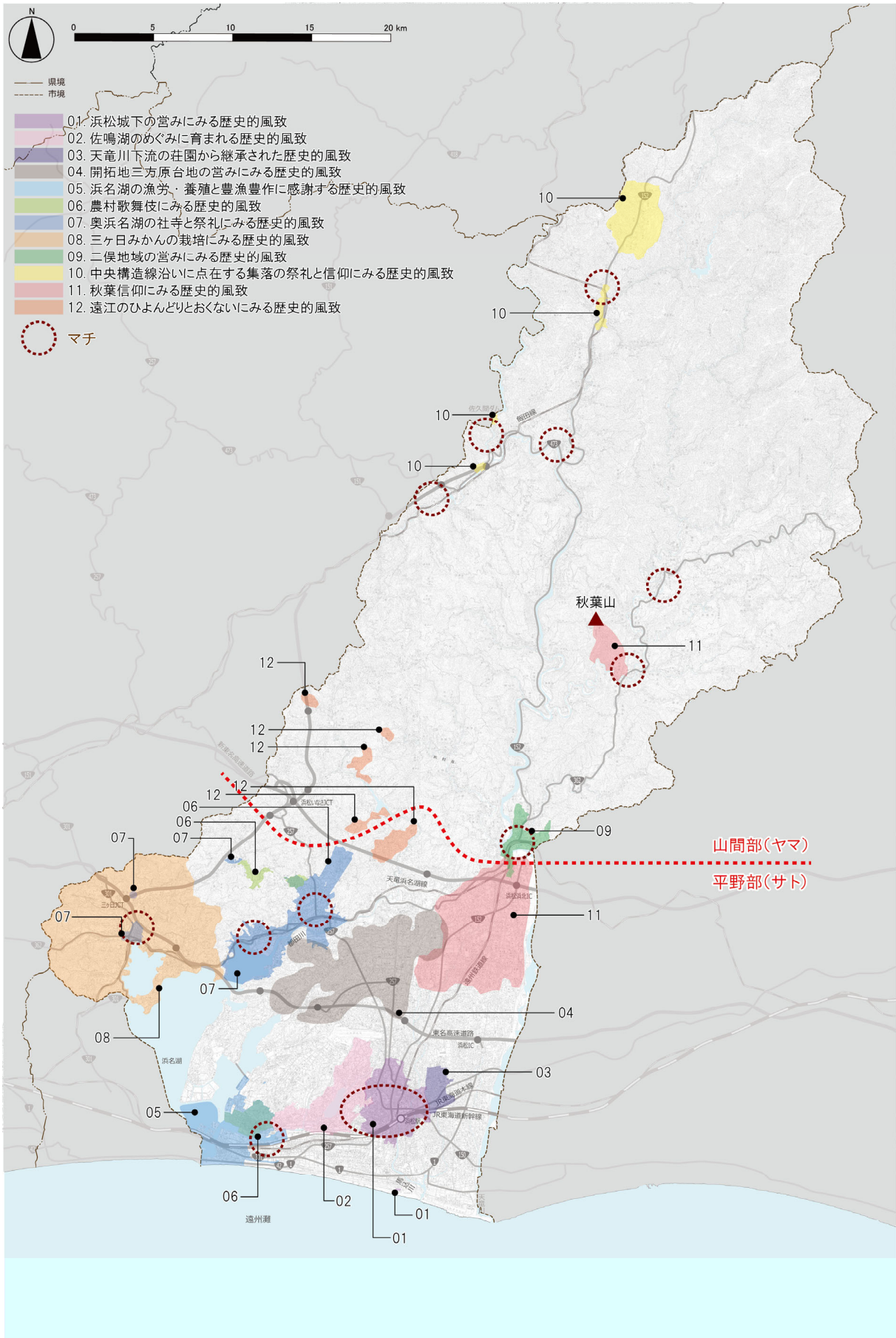


図2-0-3 歴史的風致の範囲

第 2 章

浜松市の維持及び向上すべき歴史的風致